

南極に天文台を

筑波大講師 現地調査きょう出発

南極大陸のドームふじ基地に天文台を開設しよう
と、筑波大の瀬田益道講師(42)が、日本の天文学者として初めて南極地域観測隊に参加し、来年1月に現地調査を行う。南極は極寒で乾燥し、天文観測には地球上で有数の最適地。特にドームふじ基地は標高が富士山より高く、1年の7割は晴れ。筑波大は電波望遠鏡、東北大は赤外線望遠鏡の設置を目指している。

瀬田さんは「銀河の初期の姿が初めて見えてくる可能性がある。南極での天文観測は米国、欧州、中国との国際競争にもなってい

る。調査を成功させたい」と話している。

瀬田さんは第51次隊とともに24日に成田を出発。昭和基地から内陸へ約千キロ離れた標高3810メートルのドームふじ基地へは、12月中旬から雪上車で向かう。現地では電波の大气透過率や大気中の水蒸気量、雲の様子などを調べる。

南極天文台構想は、平成16年まで国立天文台で「アルマ計画」を推進していた中井直正筑波大教授(55)が提唱。アルマは日米欧が南米チリ・アタカマ砂漠の標高約5千メートルの高地に80台の電波望遠鏡を整備中で、24年に本格的に観測を始める。

ドームふじの観測環境はアタカマ以上に良いことが、48次隊への委託調査で分かった。

筑波大は直径30センチ、重さ1トンの電波望遠鏡を開発。観測波長のサブミリ波では、銀河を構成する星のものと異なるちりやガスをよく観測できる。振動が大きい雪上車やそりでの輸送に備え、多数の部品に分割できるようにし、零下80度でも機能するよう、ヒーターを付けた。

産経新聞

2009年11月24日(火)